

## 7 「山・住」合同分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2011 in Ensyu

「山・住」分科会では、「①中山間地を活かす流域モデルの形成」「②広域連携による安全・安心な地域の形成」をテーマに、「東日本大震災から学ぶこと」の報告などを踏まえて、意見交換がなされた。

コーディネーター	豊橋技術科学大学	教授	大貝 彰
報告者	浜松市危機管理課	課長	松永 直志
行政	豊橋市	市長	佐原 光一
	豊根村	村長	伊藤 実
	阿智村	村長	岡庭 一雄
	根羽村	村長	大久保 憲一
	売木村	村長	松村 増登
	泰阜村	村長	松島 貞治
	豊丘村	村長	下平 喜隆
	大鹿村	村長	柳島 貞康
経済	森町商工会	会長	山本 充喜
	鳳来商工会	会長	片桐 幸信
住民	浜松市市民協働センター	センター長	長田 治義
	NPO法人びすけっと	前代表	福沢 千恵子

(敬称略)

### ■はじめに

コーディネーター

豊橋技術科学大学 大貝教授



豊橋技術科学大学の 大貝と申します。22年度まで5年間ほど、三遠南信地域を対象にした中山間地域の定住の問題、天竜川の

土砂管理の問題、さまざまな環境絡み、定住絡みの調査研究を進めてまいりました。その関係もありまして、本日コーディネーターを務めさせていただきます。

本日はまず、三遠南信地域連携ビジョンの山・住における重点プロジェクトについておさらいをしたいと思います。

続きまして、浜松市危機管理課の松永直志課長から、「東日本大震災から学ぶこと～三遠南信地域における防災連携のあり方～」についてご報告をいただきます。

それからビジョンでは、23年度までの4カ年を第1期と位置づけております。これまでの重点プロジェクトや推進体制について、ご検証をいただいて、24年度以降、第2期に優先的に推進する事業等について、

ご意見をいただければと思っております。

それでは、重点プロジェクトについて説明をしたいと思います。

山のプロジェクトの1点目が「健全な水・物質循環」の構築に向けた共同プロジェクトの推進です。これは、国土交通省や県、市町村あるいは住民レベルで、ダム再編や海岸侵食、水質浄化など各種事業が進められています。これらを三遠南信地域の広域連携の中で活用するという考え方になっております。2点目は、「上流域と下流域の自治体が連携した流域定住の推進体制の整備」ということです。空き家や貸し家、遊休施設を活用して、流域定住や二地域居住など、都市住民の中山間地域へ誘導する取り組みを示しております。3点目は、住の政策、「医療分野の県境を越える連携の促進」です。公立病院の広域利用や県境地域の医療施設の情報発信、ドクターヘリの県境を越えた活動支援などで、住民生活の安心を確保するための基本となるものです。4点目は、「三遠南信地域内住民に対する公共施設の広域利用推進」です。地域住民均一の利用料金の設定や、県境を越えた広域利用の促進する情報発信について示しております。5点目ですが、「県境を越える防災体制の強化」です。現在、三遠南信災害時相互応援協定を締結しており、それに新たな必要項目を追加するほか、道路機能を充実させ、緊急輸送路をしっかりと確保していこうという考え方が示されております。それでは、浜松市の松永様より「東日本大震災から学ぶこと」についてご報告をいただきたいと思っております。

## ■報告

### 「東日本大震災から学ぶこと」

#### 浜松市 松永危機管理課長

浜松市危機管理課の松永でございます。三遠南信地域における防災連携のあり方、

東日本大震災、昨今の台風15号と、それらへの対応の中で、今感じていることについて発表させていただきます。

まずは、東日本大震災の特徴、広域複合大災害とありますが、今回の震災をとらえてつけた名前になっています。被災地域が、東北3県、関東の広い地域におよびました。

それから、地震、津波、原発、いろいろな災害が複合したことによって、さらにその被害を拡大させています。

また、阪神・淡路大震災のときには、神戸が中心でしたが、避難地域が全国各地となっています。最大値1週間で38万6,000人ほどの方が避難者となっており、これは現在も続いている状況です。死者、行方不明者も1万9,000人を超える方が犠牲になっています。

そうした中、知事会などの要請によって、全国の各市町村から物資を集めて提供しています。また、人的支援についても、発生日から緊急消防援助隊などを派遣し、6月末までに延べ5万6,923人の自治体職員を派遣しています。

そして、災害ボランティアセンターが、各県において設置され、多くの方が被災地に足を向けて頑張っていただいています。

また、これは今までになかったことですが、被災地から浜松市に被災者が避難をされおり、同様の例が全国で見られます。9月22日現在、全国で7万3,249の方が避難をしております。被災者に対して、独自の支援を構築している自治体もございます。浜松では、3月22日に浜松市被災地支援対策本部会議を立ち上げ、市の公式ホームページにも、東日本大震災専用ページなどを用意させていただきました。また、3月24日には先遣隊を被災地へ送り、4月5日には、情報の一元化という目的のもと、被災地・被災者支援センターを開設しました。

では、三遠南信災害時相互応援協定につ

いてですが、これは平成8年に締結されました。三遠南信地域内に災害が発生した時に、職員の派遣、資機材や物資の提供、貸与、救援物資の提供、被災者の一時受入れ、こういった支援を行っていくということです。内容を見ると、東日本大震災という広域災害が起こっても、同様の対応ができるという状況になっているかなと思います。

ただ、現実の対応としましては、過去に2例、平成11年のときに豊橋市で竜巻の被害があったときに、浜松市からビニールシートをお送りしたことと、昨年7月に飯田市で起こった豪雨があった際、そこに給水活動で各市町が応援に駆けつけた、という例がございます。まだまだ具体的な対応というのは、経験値がないということになろうかと思えます。

それから、三遠南信地域のデータですが、面積5,733km<sup>2</sup>、人口は200万人、広大なエリアの中に、多くの人口を抱えています。資料集に80%を超える森林面積と書いてございますが、正確には85%を超えていると思えます。ということは、土砂災害の危険は、現在の異常気象の状況の中では、気をつけなければならないものであると考えています。

そうした中、平成23年9月21日に台風15号が浜松市に上陸し、中部電力が戦後最大の停電を起こし、浜松でも8万世帯規模の停電がございました。

資料集にあるのは消防ヘリの「はまかぜ」の調査で判明した被災状況です。9月21日の4時ごろですが、こうした情報は、私たち災害対策本部を設置している危機管理課のほうには、情報としてそれまで入ってこなかった状況です。

ですので、消防ヘリの活用が功を奏して、被害状況の把握ができたこととなります。

資料集に掲載しているのは、春野地区ですが、土砂崩れ、道路崩壊、いろいろなも

のが発生しています。

そして、災害対応の課題ですが、土砂災害が起こると、停電、河川氾濫、道路の損壊、土砂崩れ、孤立集落の発生等、様々な問題が生じます。現在も浜松市において、2世帯3人の方がほぼ孤立に近い状態になっていますが、地域の方の支援で、生活をしている状況です。

そして、こういった災害が起こると、指揮命令が混乱をしまして、初動の遅れにつながっていく状況がございます。

浜松市は、自然が非常に豊かな街です。天竜川、浜名湖、遠州灘があり、日常では自然豊かな街ですが、面積だけでも全国で2番目の面積を持っていますから、津波の心配があるところ、土砂災害の心配があるところ、河川の洪水の心配があるところ、都市型災害の心配があるところ、いろんな顔を持っています。その一つ一つを考えた上で災害への対応をしていかなければいけないという状況がございます。

そして、浜松市の現状ですが、東日本大震災以降の取り組みとして、地域防災計画の見直しの中で、防災施設、資機材などの見直しや非常配備体制の見直し、そして津波対策の見直しも、取りかかっている状況です。また、地域防災計画にかわるものとして、市民の皆さんにわかりやすい形で7つの区版の避難行動計画を策定する準備をしています。

それから、行政だけの力ではなくて、企業、住民の皆さんの力を借りて、みんな一つになって対策を考えていくということで、こういった体制の構築を目指していこうと考えているところです。

今後の防災連携のあり方ですが、住民、経済界、そして行政、この3つが、危機管理やコミュニティづくり、自主防災組織の育成、地域貢献を図っていくことが重要になると思います。

そして、この防災連携を現実性のあるものに変えていくための鍵は、防災力の強化にあると思います。住民の立場からは、水や食料、簡易トイレの備えですとか、家屋の耐震補強や家具の転倒防止など、ご家庭でできることをしっかりやっていただく。そして、地域内の点検、実践的な防災訓練の実施、こうしたことを一生懸命考えて、それを実践していただく。

企業の立場からは、東日本大震災のように、企業が被災しますと、雇用の問題、また産業の空洞化等の問題が生じますので、BCP（事業継続計画）の策定、それから防災訓練の実施をしながら、地域との連携を図っていただく。それぞれの防災力を改めて検証していただいて、本当の意味の防災連携が図れるような体制をつくるのが大事と思っています。

以上で報告は終わらせていただきます。

#### コーディネーター

##### 豊橋技術科学大学 大貝教授

ただいまの報告内容について、何かご質問があればお伺いしたいと思います。

#### 質問者

ご説明の中で、ヘリが飛ぶまで状況がわからなかったとありますが、それは、通信網が遮断されたからですか。

##### 浜松市 松永危機管理課長

はい、1つは通信網の遮断というのがございます。本来ですと、いろいろな河川の状態がわかるセンサーがあるのですが、そのところには、そういったセンサーがなかった、停電によって電話連絡がつかなくなってしまい、そういった情報が入ってこなかった、というのが大きな原因になっています。

#### 質問者

今の最後の対策のところ、BCPというお話があったのですが、その説明をお願いします。

##### 浜松市 松永危機管理課長

災害が起こったときに、企業はその存続を図っていかなければいけません。

また、災害時と平常時という違いの中で、普段やっている業務の中で、優先順位を決めて、どこかを削って、災害対応として当たっていくかという、そういった行動計画をあらわすのがBCPです。例えば自治体で言いますと、新型インフルエンザが流行して、職員がインフルエンザにかかってしまったときに、どんどん人は足りなくなっていくしますので、平常時における業務をどう削って、自治体の活動を維持させていくか、ということになるかと思います。

#### コーディネーター

##### 豊橋技術科学大学 大貝教授

行政、大企業では既にBCPを策定しているかと思います。問題は、中小の企業が、災害が起こったときに、どれだけ早く業務を再開できるか、にあると思っています。

また、防災のときの情報をいかに速やかに、正確に収集していくか、これは一番大事なことですが、いざ災害が起こると、そういう問題がどうしても起こってしまう。どれだけ事前の備えをしているかというのは、極めて重要な話と思います。

#### ■議論・意見交換

続いて、重点プロジェクトについての話です。山・住合同分科会では、合わせて5つの重点プロジェクトが掲げられています。

第1期におけるプロジェクトの評価、議論をしていきたいと思いますが、お手元の資料集に、今の5つのプロジェクトの第1

期工程表というものが掲載されております。これは、昨年8月のSENA委員会で決定された工程表で、現在までの進捗状況が記載されています。

これをもとに、プロジェクトの評価と、第2期で優先的に推進するプロジェクトについて、ご意見をいただきたいと思っております。

### **豊橋市 佐原市長**

まず、健全な水・物質循環のところですが、一つ大きな目標として掲げておりました三遠南信流域都市圏の活力向上プロジェクト、これは、中部圏広域地方計画にリーディングプロジェクトとして載せていく方向となりました。

国へ皆で働きかけた結果、選定をされたということで、目標を達成したと思っております。それから、東三河においては、水の問題については、設楽ダムが一番大きな課題になっていると思っております。現在検証作業中ですが、一体となって、国に、必要性、そして再検証の過程での意見を述べさせていただいているところでございます。

水について言いますと、水に恵まれているところと、恵まれていないところと、それぞれ感じ方が違います。

東三河も、豊川用水によって渥美半島の農業が先進的農業に変わったことを感じている地域、それから洪水等の心配を感じている地域、それぞれで違ってまいります。

私どもの街は、生活用水に関して言うと、非常にいい水を飲んでおります。山のお蔭で、こんないい水が飲めているんだよ、ということを知ってもらうために、水道水をペットボトルにして販売したところ、大変好評でございました。一方では、保存期間も長い水ということですので、災害時にも普段飲んでいる水で生活ができてよかった、ということになるものと思っております。

それから、上流域と下流域の自治体の連

携の推進関係でございます。東三河では、東三河シニアリフレッシュ事業、極・奥三河というのを展開させていただいております。2泊から3泊の地域体験プログラムを実施し、参加者から好評を博しております。21年度から始めておりますが、22年度は、これを10日から30日と、短期から中期、それから長期へと目指しております。地域産業支援プログラムという形で実施しておりますが、今年は養殖漁業という形で4名の方が参加されております。

住の方で申しますと、一番大きく取り上げられるのは、医療と県境を越える防災です。防災への関係で、航空消防応援協定というのを結ばせていただきました。これは、浜松市の持っておられるヘリを利用していただくということで、東三河、そして南信州広域連合で提携し、県境を越えての住民の生活の安全・安心を守るため、大いに役立っております。

それから、2番目の公共施設の広域利用については、平成21年度から浜松市と飯田市と豊橋市、3つの市が持っております美術館の連携事業を行っております。三遠南信交流展を開催することで、着実に文化面での交流が進んでいると思っております。

あとは、それぞれの地域が持っている公共施設をどうやって統一して利用していくか、そんな仕組みづくりに、これからもうちょっと力を入れなければいけないかな、と思っております。

### **コーディネーター**

#### **豊橋技術科学大学 大貝教授**

山・住含めて、これまでいろんな取り組みが行われてきているわけですが、その評価について、ご意見をいただきます。

### **豊根村 伊藤村長**

佐原市長から、平野部からのコメントが

ありましたので、一番上流部の豊根村からお話をさせていただきます。中流域、下流域、上流域の相互理解はもっと深めていかなければいけないと思っております。

今、愛知県の森と緑づくり税という大きなプロジェクトの中でいろんな事業をさせていただいていますが、やはり行政の壁をどうやって乗り越えるかというのが大きな課題と思っております。

上流域の役割をしっかりと果たしていく、中流域も役割をしっかりと果たしていく、それぞれ市町村でやるんですけども、行政の枠を超えた取り組みがないと、なかなかうまくいかんだろうな、と思っております。流域一体というなら、その壁をどうやって乗り越えるか、また、国にそこをどういうふうに訴えていくかというのは、ダムの問題等を考えるときに、そのことが1つ進めば、クリアできるのかな、と感じております。評価というより、そこが一番問題じゃないか、と思っております。

#### コーディネーター

#### 豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。行政の枠を超えて、民間、地域住民も含めた、特に水の問題ということで理解しました。

#### 根羽村 大久保村長

長野県の根羽村です。矢作川の流域、最上流が根羽村でございます。すぐ隣は愛知県豊田市、下流に安城市とあるわけでございます。この流域は、上流、下流の長い歴史を持っており、行政と民間、自治体同士がいい関係で地域づくりをしています。

その中で、上流としては、こんなことをしたいから、下流の皆さん、応援していただけますかとか、下流の皆さんは、こんなことをしたいから、上流の皆さん、応援していただけますかという、お互い要望する

ところを素直に出して、できることを助け合う仕組みが大分できたかな、というのが現状でございます。

特に、流域連携については、まず一つの川が連携して、それが今度は圏域のようところで連携していくと、また大きな仕組みになるのかな、と感じておるところでございます。

それから、住の医療の関係ですが、根羽村はちょうど愛知県、静岡県の間ですので、ドクターヘリとか救急ヘリは、長野県の佐久と松本からも来るようになりましたけれども、どうしても遠い場合は、愛知医大か浜松からも出ていただいたことがございます。非常にありがたいな、と感じているところです。

#### 阿智村 岡庭村長

阿智村の岡庭でございます。

山の問題ですが、実質、中山間地域問題の最大の課題というのは急激な人口減少なんですね。嫌な言葉ですが、限界集落と言われるような集落の壊滅、そういう状況に立たされているわけです。

平成12年に、根羽村、平谷村、阿智村で西部山麓災害というのがあったのですが、非常に大きな災害で、今まで荒れたことのない山が荒れる状況がございました。ああいう災害が一度起きれば、山の崩落というのは、止めることができなくなるのでは、と非常に危惧しておるわけです。

そういう点から、水系ごとにどういう形で連携ができるかということが重要で、この3圏域全体というよりも、水系ごとの連携ということが大切になるのではないかと。

根羽村の大久保村長のお話がありましたように、矢作川水系の連携というのは非常にうまくいっています。豊川の水系のお話もございました。天竜川水系は、どうもうまくいっていないと思います。というふう

に、重点プロジェクト工程表にあるような形では、上流域と下流域の連携、共有化というのが、進んでいないのでは、という気がしています。これからの課題は、水系ごとの連携共有化をどういう形で進めていくかということ、重点的に考えていかななくてはならないのでは、という気がしております。

#### コーディネーター

##### 豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。今のご指摘は、今後について大変重要なお指摘かと思えます。三遠南信という枠組みに捉われずに、もう少し幅広く問題を捉えていく必要があるのかな、と思います。

#### 泰阜村 松島村長

下伊那郡泰阜村の松島でございます。天竜川水系に泰阜ダムがあり、その下が平岡ダムで、その下が佐久間ダムです。

一貫した土砂管理、堆積土も含めた活用の話が、三遠南信サミット開始当初から言われてきていますが、いろいろなハードルがあって難しい。こういった計画の中で、少し具体化できるようになるとうれしいなという感想です。

それから、豊川の水系の皆さんが豊川水源基金というのをつくっておられて、山の整備にお金を出していただいております。

最近、山は国で言うほど、そんなに大事にされてなくて、投資しても返ってこない、ということもあります。山に投資できないと、間伐とか除伐とか、いろんな手入れが、投資する人が限られているため、せっかくの基金を、昔のようにうまく使うことができないということがあります。したがって、ご理解が得られるのなら、矢作川水系の根羽村さんが上手にやっておるように、水源基金みたいなものをもう少し拡充して、山

村が本当に使える、使い方の議論ができたらどうかな、と思っております。

それから、流域定住の話は阿智村長が言ったとおりでして、山村に住む人が減る危機的な状況で、どんな情報提供をすれば、上流に興味を持っていただけるのか、暗中模索の状況です。ここまで積み重ねられてきた三遠南信の連携というのは大変にすばらしいものだと思っておりますが、私どもの南信州定住自立圏構想だけではなく、もしSENAが広域連合等を将来的に検討するのであれば、そういう広い中で、定住自立圏のような考え方ができていかなのかな、と思っております。

#### コーディネーター

##### 豊橋技術科学大学 大貝教授

豊川の水源基金というのは、どんな仕組みか説明いただけますでしょうか。

#### 事務局

主に豊川水系の恩恵を受けている下流域で基金を募りまして、それを上流域に還元するという考えのもと、間伐、除間伐等に使っています。林道整備であるとか、除間伐を行う人材育成等、水源林の保全に役立つものに使っています。

#### 鳳来商工会 片桐会長

鳳来商工会の片桐です。豊川水源基金のシステムは、矢作川の例が、モデルになっております。まだ十分だとは思っていませんけれども、山林のいろいろな整備に使ってはおります。湯谷温泉で言えば、温泉施設「ゆ〜ゆ〜ありいな」、名号の「うめの湯」の整備、そういうものに幅広く使われております。これからもっと整備して、使い勝手のいいものにしていただけたらいいな、と思っております。

それから、この前の台風15号のときに、

奥三河も厳しい状況にさらされました。山へ入りますと、風倒木が風の通り道に全部ばたばたと倒れております。特に、国道151号が豊根村へ入る手前のトンネルは崩落している。あるいは、新城市から作手に上がる301号が不通になっている。それらの復旧も、3月、4月はめどが立たない。奥三河は、今、交通が寸断されている状況であります。

この前の出水を見てみますと、上流にある宇連ダムは、洪水調節能力がないので、台風が来る寸前でも、ほぼ満水状態です。雨の一番ひどいときにダムを越流して流れる水と合わさって、ものすごく高い水が出るわけですね。

その点、東三河で目標としています設楽ダムは、洪水調節能力が2,000万トンございます。豊川水系では、設楽ダムの建設がこれからの大きな課題だし、実現したいものだな、と考えております。

### **大鹿村 柳島村長**

水問題で1つ。天竜川は、山地からの土砂の供給が非常に多い川です。大鹿村のすぐ下流に小渋ダムがあるのですが、100年の予定が50年でほぼ埋まってしまうという、土砂の流出が非常に多いところなんです。

国土交通省で、ダムの土砂を洪水時にそのままダムにためないで、ストレートに流すという大工事をやっています。工事に4年、5年かかって、それから運用が始まるということです。数十億円の費用がかかるけれども、砂が天竜川に供給されて、治水に役に立つという考え方でやってくれます。洪水調節用のダムとして、しっかり小渋ダムの機能を発揮してもらおうという考え方のようです。

上流域、下流域で根羽村さんのような関係を持つとしても、大鹿村へ来るまでに、ダムが4つも5つもあると、どうしても縁

が切れてしまうのかなというイメージは持っております。

それからもう一つ、長野県は、森林税として、住民税に500円上乗せして徴収しています。それが森づくり、治山治水関係にも使われていますが、山地の荒れを防ぐところまでは、いっていないというのが現状だと思っております。

天竜川上流の三峰川では、排砂トンネルの運用を2年ぐらい前からしています。大量の土砂が出たときに、そのまま下流に流す対策をとって治水能力を高める努力をしているということは、下流域の皆さんにも、ご理解をいただきたいと思っております。

### **コーディネーター**

#### **豊橋技術科学大学 大貝教授**

ありがとうございます。天竜川の土砂管理問題は、豊橋技術科学大学の青木先生が研究されていて、上から下まで総合的な土砂管理をどうやっていくのか、なかなか難しい問題のようです。問題は、管理主体がそれぞれで異なっているところで、海岸はそれぞれの市町村、港湾は国の管理なので、管理者が異なるところで、それぞれが個別に頑張っているけれども、なかなかうまくいかないのではないかと、主体が連携をして、トータルでよりよい方向に向けたマネジメントが必要ではないか、という指摘はされているのですが、具体的にどうするかは非常に難しい問題のようです。

#### **森町商工会 山本会長**

静岡県森町商工会の山本と申します。森町は、太田川に注ぐ水源にあるわけですが、昔、やはり山の手入れが悪くて、大変な災害をもたらしました。山というのは、適正に手入れされ、土や植栽された表面、地表が緑に覆われていれば土は崩れない。だけど、手入れがされないために、地表の草も



低かん木もない状況になり、自然の中でさらされた土砂が、風や雨によって下へ流れる。それが、大量の雨によって、土砂崩れの基となる。こういう経緯で大きな災害があったわけですし、今回の奈良地方における災害も、やはり山の営利を追求する余り、現況では手が入らない、そういう中で起きた災害ではないか、と思うわけです。山というものは、手入れがうまくいっていないと、そういう災害を起こすということ、雑木あるいは草木がこれらを防ぐ一方で、水源を涵養しているということが、忘れられてしまっているのではないかと思います。それを思い起こし、山の原点、水源涵養は何だということを考えて、施策を講じていく必要がある、と改めて思いました。

#### コーディネーター

##### 豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。

最近の水害等が起こるにつけ、そういうことを改めて考え直します。中山間地域、山の役割というのは、日本の国土そのものを保全する重要な役割を果たしてきたわけですが、どうも最近少しずつ、いわゆる地球温暖化の影響、集中豪雨等で、逆にそれが明らかになってきているということだと思います。

##### 豊橋市 佐原市長

豊川水源基金を運用していて、一番困っているのは、お金の問題ではなくて、実際やろうと思ったときのオペレーションの問題です。土地の所有者が、東京へ行っていてわからないとか、もう分筆されていて、どうなっているかわからないとか、いろんな権利問題を整理しなければならない。

それから、物理的にそこに入っていったときに、間伐、除伐が困難な山になっていたりとか、色々な問題があります。

さらには、商売にならないから、手放したいという人が結構いるそうです。そういう人たちから、例えば豊根村さんでは、村で引き取ってほしいと、言われるのですけれども、引き取った途端に、民間の管理以上の管理を役所に求められるのです。

単位面積にかかるコストが全く違ってきて、とてもではないけれども、維持管理ができない。実はお引き取りしたくてもできない山というのもたくさんある。たくさん問題がある中で、私たちの水源基金はやっています。矢作川水源は比較的うまくいっているというお話がありました。山の形が違ったり、歴史が違うところとか、あるのですけれども、良いところから学んでということですね。そこで一番難しいのは天竜川です。利権の絡み方が複雑で、ダムもたくさんある。一步一步前に進めることを重点プロジェクトの中でやっていくというのは、すごく良いテーマであるし、豊川水源基金が悩んでいることでもあるので、一緒になって考えていきたいと思っています。

##### 豊丘村 下平村長

下伊那郡豊丘村です。三遠南信地域は、古来、特に天竜川を中心に一体化した場所じゃないかと思うんです。天竜川は信仰の川と言われます。古代は荒玉河、平安時代は天中川と呼ばれて、それが今の天竜川のもとじゃないかなんていう話もあります。かつて、この地域を天竜川沿いに野武士や修験者が切り開きながら流域を開発していったとも言われております。

飯田が生んだ柳田國男研究の第一人者、後藤総一郎先生は、天竜川のことを神の通り路と表現されました。そのくらい文化的に流域沿いにつながっているということでもあります。

学生時代に私も感じたのですけれども、

浜松の人たちは「ぶしょったい」と言うんですよね。飯田は「びしょったい」と言うんですよ。それとか、「何をとってくれ」というの、「何さらとってくれ」「さらさらとってくれ」と言うんですね。静岡の人たちと非常に言葉も似ています。

川を使っただけの経済的なつながりもありま  
すし、すべて文化も経済もしっかりつな  
がっていたのが、時代が変わってきて、道  
だとかダムができ、それが寸断された、と  
考えられるのかなと思います。

三遠南信自動車道ができることによって、  
もともとあった文化や歴史を共有する地域  
が、再び一緒になることができる。そうい  
うように捉えていきますと、上流域と下流  
域の交流の切り口というものが、また違う  
形であらわされるのではないかと思います。

一例として、豊丘村に、幕末の女性国学  
者で今年生誕200年を迎える、松尾多勢子  
という者がおります。彼女は歌の練習のため  
に、当時火防の神様である秋葉様へのお参  
りが盛んだったものですから、浜松から来  
られた秋葉様のお参りの人をお願いして、  
浜松の歌の先生のところへ歌を携えて行っ  
てもらっていました。歌の先生にも同じよ  
うに返してもらって、年に1度とか2度だ  
とか、ゆっくりしたペースではありますけ  
れども、地域の本当の交わり方、連携を完  
成していた。

上流と下流、水のこと、かつての信仰の  
こと、文化のこと、歴史のこと、そういう  
ものを再度この三遠南信道が、本来の文化  
の近いもの同士の手を結びつける、そうい  
う認識を持って、さまざまな問題に対処し  
ていくことが、三遠南信の広域の自立共有  
圏だとか、そういうものの基礎になるん  
じゃないかなと思います。

#### コーディネーター

豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。

市民代表のお二方、今までのプロジェクト  
について、評価、ご意見があればどうぞ。

#### NPO法人びすけっと 福沢前代表

長野県飯田市や高森町で福祉系NPO活  
動をしている福沢です。

昨年住民セッションの中で、三遠南信地  
域の交流や情報発信をきちんとしていこう  
と南信州交流の輪ができました。

それで、南信州はもちろん浜松や豊橋の  
方々にご縁ができ、いろいろな活動がある  
んだなということを知りました。

お祭りや道の賑わいを扱っているNPO  
の方、食材を加工して食文化につなげてい  
こうと活動されている方、地域おこしの形  
で地域の人たちにエネルギーを与えている  
グループ、南信州をもっと地域外に伝えよ  
うと一生懸命活動されている、そんな団体  
の方たちとめぐり合いました。

そんな方たちが、お互いのことを知る中  
で「実際に活動しているところで、地域の  
様子を見ながら、話し合いができればいい  
ね」ということで、この2月に私たちの天  
竜川沿いの事務所に来ていただきました。

その日は大雪が降ったのですが、伊那谷、  
売木村、天龍村とか、私たちの地域からは、  
1時間、1時間半くらいかかる地域からも  
足を運んでいただきました。また、豊橋の  
方からも足を運んでいただきまして、会場  
が熱気にあふれて、ああ、これが本当の交  
流なんだな、と実感を得ました。

中山間地の暮らしというのは、どちらか  
というと後ろ向きに捉えがちです。けれど  
も、地域で活動している方たちは、本当に  
生き生きと、マイナスがあるんですけども、  
それをプラスに生かしながら、発信し  
ています。その姿を目の当たりにして、す  
ごいなと感じました。

顔が見える関係性をつくっていくという

ことが大事で、災害とかといろいろなお話がありました。小さな地域のちょっとしたコミュニケーションがとれているところは、避難や助け合いで強い力を発揮した、と聞いたことがございます。

やはり地域の活動からお互いを知る、こういう関係性ができているからこそできる災害時の支援体制というのがあるんじゃないかな、と思います。これからも、この南信州交流の輪を軸にして、遠州、東三河の方々と交流ができれば、と思っております。

### 浜松市民協働センター 長田センター長

浜松市民協働センターの長田です。NPOや市民団体を中間支援していくことがセンターの役割ですが、市民活動を担う次の人材を育成する役割もあります。昨年、20代から30代の前半の人を中心にそういう講座をやったのですが、浜松市民の中で、ほとんどの受講者が、船明ダムより北へ行ったことがないというのが現実です。

その人たちに、三遠南信という言葉投げかけたときに、知る人はだれもいません。そういう中で、さらに信州とか奥三河に目を向けていくためには、まずは天竜区、それから北区を知ってもらうことから始めないといけないな、と感じているところです。

行政のようにダイナミックな活動はできませんけれども、少しずつ風穴をあけて、北に目を向ける人材を育てていく必要があると思います。

今年から浜松市の中山間地域ボランティア交流事業という委託事業をいただきました。民間の機動力を使って、定住者を何とか大都市圏から持ってこようと、ポスターを東京のすべての区民センターに配っていただきました。

天竜区のすべての自治会や協議会、婦人会、商工会、観光協会を訪ねまして、同じようなポスターで、人が足りないところ、

手伝ってほしいものをどんどん登録してくれ、というお願いを始めたところです。

これが、資料集に有る浜松市中山間地新興計画の推進事業になってくると思います。

春野町の勝坂神楽からは、間もなく継承者がなくなってしまうので、「県外から継承者の募集をかけてくれ」という依頼がありました。「移住してくれる人は、なお歓迎しますよ」ということです。

それから、春野町で芸術活動を行っている家族と一緒にアート村実行委員会を立ち上げて、市民協働センターから全国へ、一緒に山をアートの森に変えてくれる仲間を募集しています。ただ、北遠地域からはたくさんのご要望があるものの、協力者は見つからない状況です。

そこでセンターでは、水窪町で紅葉の下に彼岸花を植えよう、というごく簡単な活動から、北へ目を向かせるツアーを計画しました。これは、少しずつ参加者が集まっているところでございます。

小さなアクションかもしれませんが、中山間地のファンを1人でも2人でも増やして行って、市民レベルで三遠南信という言葉を理解してもらうように進めているところです。

1つだけ、来年はいい報告ができると思うのですが、本田技研の下請で、社員が250名から300名ぐらいの会社がございます。この企業から、CSR（企業の社会的責任）として、「中山間地の交流ネットワークに参加をさせてほしい」、「ある程度の資金の投入も考えている」というご相談をいただいています。協働相手は、行政のみでなく、企業にもあるということをお話していきたいと思っています。

### コーディネーター

#### 豊橋技術科学大学 大貝教授

やはり民の力がなくて、こういったこと

はなかなかできないかなと思います。

重点プロジェクトの評価としては、水の話、特に上下流でどう連携していくんだという話にポイントが絞られてきたと思います。住の方の医療分野の連携、あるいは公共施設の広域利用、あるいは防災体制の強化についてはどうでしょうか。

### **豊根村 伊藤村長**

医療分野について、お話しさせていただきたいと思います。豊根村はまさに三遠南信の真ん中にあり、北は長野県、東は天竜川を境にして浜松市と接しております。

医療問題には、新城以北の4市町村で北部医療圏という圏域を組んでいます。浜松まで1時間半ぐらい、飯田市まで1時間強、それから信州路まで1時間ちょっとですね。全部同じ距離感ですが、住民は、飯田市とか浜松の聖隷病院にかかることが多いんですね。医療圏の枠を超えておるわけですが、もう少し機能的にいくのがいいのかなと思っています。行政の枠というのは、やはり住民の生活には関係ない、都合がいいほうへ行けばいいんだろうということを感じております。そういったことを、もう少し進めていけたらと思っています。

一昨日、三遠南信の鳳来インターで開通前のイベントがありました。開通によって、浜松に30分ぐらい近くなるということで、今以上に目的が進むことを望んでおります。

### **コーディネーター**

#### **豊橋技術科学大学 大貝教授**

どうもありがとうございます。

それでは、第2期、これからどこに重点を置いていくのかということで、ご意見をいただけたらと思います。

### **売木村 松村村長**

長野県下伊那の売木村です。私の村は、

全国で離島を除けば人口が少ないほうから5番目です。山・住ということで分科会が進められておりますが、間に「に」を入れれば、山に住むということで、山に住むということは、そこで生活ができなければだめだと。そこに住むことができなくなってきたということは、やはりお金がとれないというのが一番なんですよ。

5つのプロジェクトが上げられていますけれども、やはり都市部、下流部・上流部で形態は違って、所得が上がるようなプロジェクトにしていかないと、いずれにしても山に人が住めなくなってしまう。これからのプロジェクトの中で、とにかく山に住む、住んでそこでなりわいができる、そういう形の事業が進められていけばいいかなと思っています。

それには、先ほど151号の太和金トンネルの通行止めの話がありましたが、通行止めになったから、車で来られないわけじゃなくて、10分ぐらいで迂回できるようになっています。そうした情報提供をしていくことが重要です。また、豊川水源基金のお話もございましたけれども、今は山林を育てていく、ということで使っていますが、人を育てるような使い方、もう少し私どもも一緒になってやれるようにして、下流域からお金が上流域に上がってくるような形がいいのかな、と思っています。

それから、売木村の愛知県との県境、茶臼山の山麓に県営の南信州広域公園という公園がありまして、東三河、浜松の方に多く利用していただいております。

お隣の豊根村さんには、芝桜の素晴らしい公園ができております。これを南信州地域の自治体にも開放していただいて、大きなイベントを開催するなど、共同的な事業が進んできております。そうしたことを継続しながら、何とか下流からお金が上がってくるような方法を講じるプロジェクトが

欲しいな、とっております。

#### コーディネーター

##### 豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございました。山に住むためには、所得の向上、一番望ましいのは雇用の場の確保だと思うのですが、そういった意味では、林業の再生というのも非常に大きな問題かと思うのですが、どうでしょう。

##### 鳳来商工会 片桐会長

最近、小規模の水力発電ができないかな、と山の連中はよく言うんですが、その時に問題になるのはやっぱり水利権だよと。上下流の相互理解が進めば、地方自治体等が仲立ちして、小規模水源を使った発電を、山の住民に提供できるというような方法が、一つのテーマになるじゃないかなというように話をしています。

#### コーディネーター

##### 豊橋技術科学大学 大貝教授

一つのご提案がありましたが、何かそういった取り組み、こんなことをやっているよというのがもしあれば。

##### 豊橋市 佐原市長

皆さんの地域で持っている力で、素晴らしいものは、たくさんあるのですが、普段から馴染んでしまっていると、それに気がつかない、ということがあるのではないかという気がしているんです。

東三河、奥三河で言うならば、花祭りというのは、典型的な事例だと思います。すばらしいことだけれども、いつもやっているんで、地元の人にとっては普通のことになっている。地元で多少おもしろいな、おいしいな、楽しい行事だなと思っていることの中に幾つか埋もれていると思うのです。

例えば豊根村には、この空気、この水で

ないとできないと信じて、ドイツパンをつくっている方がいたり、他にも色々な方がいます。そういったことを形にできる仕組みがあると、1,000人も2,000人も来ないかもしれないけれども、10人、20人から進んでいくことは可能ではないでしょうか。

私たちの東三河でやっているシニアリフレッシュ事業等も、そういった方向に向かっていかなければいけないのではと思っています。ご意見がある方がいらしたら聞かせていただければと思います。

##### 根羽村 大久保村長

まさしく今おっしゃられたとおりでと思います上流、中流、下流地域それぞれ人が住み続けることによって、国土が成り立っていくのですが、上流の山の中が成り立ちにくくなっているというのが現状です。人、物、お金が動くことによって、そこにいろんな産業ができ、人が住み続ける仕組みができると思いますので、長田さんからご説明がありました、いろんな方をご紹介していただくというのは、大きなポイントになると思います。特にそれをやる時は、山の中の人たちは、こういった部分をしっかりやってほしいんだよとか、下流から応援に来てもらう人は、こんなことをやるんだよ、ということがうまく結びつくという結果になると思います。

それから、山本会長のおっしゃった、山をしっかりつくって、土砂崩壊とか、表面の土を流さないようにしなきゃいかんというのは、まさしくそのとおりでと思います。そういった部分にもいろんな形で皆さんの支援をいただきたいと思います。また、異常気象によって想像できないような深層崩壊が起こり、奈良の方は山が崩れています。現状防ぎようがないものだというお話を聞きますので、そういった危険情報をもう一度それぞれの町村で把握しながら、全体で

も把握しておかんと、仮に大きな川でそんなことがあったときは大変なことになると思います。ですから、そういった情報も共有する必要があるのかなと感じたところであります。

### **豊橋市 佐原市長**

これからのことですが、三遠南信地域が、新たな地域連携を模索するということです。ここで忘れてならないのは、住の問題にしても、防災の問題にしても、都市機能を中山間地域へ提供するという点では、非常に安心だし、今後もこれを強化していただきたいと思います。ですが、ともすると三遠南信全体の連携は、都市間連携に傾倒していく危険性があるのではないかと感じるわけですね。

先ほど水問題でかなり時間を割いたということは、実は中山間地域に暮らす人たちにとっては、水問題は、暮らしの問題なのです。そういう点から今後の三遠南信の連携を考える場合には、都市間連携をしながら都市的機能を強めて、ポテンシャルを上げていくということも大事ですが、もう一つ、三遠南信の中山間地域の持続可能性を、どうやって全体で支えていくのかをプランの中に入れて連携する必要があると思います。

そういう点では、長田さんのお話は大変参考になります。私は、浜松市が合併して、天竜市とか水窪とか、厳しい状況にあるところがどうなったのかと、非常に関心を持っています。

そうすると、浜松市で長田さんがおやりになったようなことを、三遠南信全体でコーディネートする人がいて、三遠南信全体の中山間地域の持続性や交流、定住を、やっていただくことができれば、これはかなり違ってくる。山を守る人が出てくれば、必然的に水問題も解決してくるのではない

かと思っています。そういう両側面から地域連携の問題意識を高めていただくと、三遠南信の今後の発展につながっていくのではないかと考えております。

### **コーディネーター**

#### **豊橋技術科学大学 大貝教授**

ありがとうございます。非常に重要なご指摘だったと思います。今の話に関連して。

#### **浜松市市民協働センター 長田センター長**

豊橋市長さんのおっしゃったことに関連するのですが、仕事を山間地につくるということをしています。例えば、水窪にあるおいしいコンニャクですとか、天竜川漁協がすばらしい無菌のアユを育てているということ、浜松の都市部の商業者は全く知らないんですね。

呉竹荘という結婚式場に、それらをご紹介したことがあります。すると、コンニャク屋さん、たった1カ月間で1年分を売り上げたり、天竜川漁協に一度に呉竹荘から500kgのアユの注文が入ったりするんですね。

それから、講習会で、水窪の方に鹿肉を提供していただいたんですが、我先にみんな食べてらっしゃいました。浜松市内のイタリア料理店に、鹿肉がどこかから手に入らないかという相談も受けています。また、森林組合の方に、チェーンソーを持ってきてもらって、格好いい姿を見せてもらったんですが、女性の参加者でアメリカンフットボールみたいな防護をつけて、間伐レディース隊を結成したいとおっしゃった方もいました。

豊橋市長がおっしゃったとおり、地元の方にとっては普通なんですけれども、そんなアクションをこれからも進めていって、長野県や奥三河にも交流を進めていきたいな、と考えているところです。

## 豊丘村 下平村長

リニアモーターカーの話でございますが、上流にも、水窪だとか、本当に厳しい山のそのものというところと、飯田の周辺、豊丘、喬木、高森、松川あたりの穏やかで段丘の広いところがあります。そこへ16年後にリニアモーターカーの飯田駅ができます。品川から38分、名古屋から、17～18分と言われております。直通だと、東京、品川、名古屋間を40分ですから、どこでもドアが、飯田と東京、東京と名古屋の間にあいたようなものです。

片や2,000万、片や1,000万の人口がいる中で、飯田・下伊那というのは17万人です。ですから、穴があいた瞬間に、都市部からの圧力で、たくさんの方が飯田・下伊那に出てきてしまうと思うんです。

その中で、私たちは何を守っていかなければいかんかといったら、やっぱりこの飯田・下伊那、天竜川沿いの、天竜川水系の自然ですよね。アルプスに囲まれて、段丘があって、天竜川があって、農業があって、林業があって。それを今からしっかりと、行政としてお金をかけて守りながら、自然と農業が織りなす日本人のふるさとの風景、そういうものをしっかりと守りながら、そのときをじっくりと待つ。その中で、三遠南信も入ってくる。新たな飯田・下伊那のあり方もあろうし、三遠南信のそれぞれの市町村のあり方もあろうかと思えます。

未来は非常に明るくて、飯田・下伊那の方に、どんどん向かっていくぞ、というような地域になるように頑張ります。そうした時、長田さんがやられているような運動というのは本当に素晴らしいことなので、ぜひ教えていただきたいと思えます。

## NPO法人びすけっと 福沢前代表

南信州の交流の輪には、南信州では何で

もなかったようなお祭りや食材を生かして、地域発信している、そういう団体がたくさんあります。売木村でお米をつくって、150人くらいの方がお田植えや稲刈りとか、そういうことで楽しまれている。南信州で暮らす私たちは、何でもないことですが、豊橋の方も、そういうお田植えのときに、「わあ、楽しい」と言いながら、喜んでいただけることが、お迎えする私たちも楽しいなと思っております。

そして、定住となったときに、そういう方たちをきちんとお迎えして、そこで暮らしていただけるように、私たち地域の住民が、いち早く情報をキャッチしながら、お互いにネットワークをつくっていくことが大事かなと思っております。これからも南信州交流の輪を生かしながら、アピールしていきたいと思っておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

## 豊橋市 佐原市長

最後に医療の話でございます。救急関係で東三河は、徐々に豊橋市の救急情報センターに一本化して、市町を越えて運営しています。県境を越えるというと、なかなか簡単ではないのですが、実際は湖西の人たちも豊橋の医療機関にかかっている。近いところ、設備が整っているところ、医者がいるところにかかっています。

今はまだ産科でしかやっていないのですが、好きな病院にかかるばかりではやっていけない状態になっています。お産ですから何カ月か先に、どこの病院で産むかがある程度分かる。できるだけ希望も聞きながら、それを当てはめていって、それでもやっぱり最後は、場合によってはあっちで産むしかないという「振り分け」をやるんです。お医者さんの状態とか、ベッドの状態とか、いろんなことを情報共有して、さばいているところまで来ています。

今後、医療制度がどう変わるかわかりませんが、もっと厳しい状況になった場合に、救急医療などは、三遠南信という広域の枠の中で、常に情報共有して、指示を出せるようにする、ということが必要になってくると感じています。

ちょっと勉強しながら、そんなこともやっていきたいなと思っているところです。

## コーディネーター

### 豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございました。

まとめですが、評価については、水の問題、そして上下流の連携の問題、いろんなご意見、評価をいただいたと思います。

具体的には、天竜川の土砂管理の問題がなかなか進んでいないということ、山にお金が出る仕組みとして、豊川の水源基金等をもっと拡充していけないかというご意見もありました。

三遠南信は、天竜川流域と豊川流域が主体なわけですが、それぞれの流域の中で連携を考えていく必要がある。その場合、SENAとの関係はどうするのかという、これも一つ問題になると思います。

また、第2期についていろんなご意見をいただきました。重要なことは、情報共有ということですね。防災の話でも、災害リスク、土砂災害に関する情報の共有をすべきであるとか、あるいは小規模な水力発電の取り組みはどこかないだろうかという話がありました。この地域の中で、それぞれすばらしい取り組みが行われているんですけども、なかなか横につながっていかない、皆さんと共有できていないところがあって、情報共有をもっと図っていく必要があると思います。

山に人が住むという基本に立ち返ったときに、その情報共有をどれだけ進めていくかが1つ重要なことだし、もう一つは、人

を育てる、人材育成です。SENA取り組んでいるインターンシップ事業では、1,000人近くの方が研修を受けています。その受け皿となった各地域のNPO等の中で、自分達と同じような取り組みをしている団体が、ここにもあるんだ、という横の結びつきが出てきていると聞きました。

もちろん、十何年、昔からの三遠南信地域でのさまざまな活動はあるわけですが、市民レベルでの新たなネットワークが形成されているような気がします。

そういった中で、長田さんから、中山間地域でのいろんな取り組みを紹介していただきました。そうした取り組みを、浜松市だけの取り組みではなく、三遠南信全体の取り組みとして拡充していくのが、極めて重要な今後のテーマかなと思いました。

もちろん、医療分野の連携であるとか防災体制の強化、公共施設の広域利用、この辺についても、今のような取り組みを進めていく中で、いろんな可能性が見えてくるのでは、と考えております。大変活発な、内容の濃い意見交換ができたと思います。以上をもちまして、この分科会を閉会いたします。どうもありがとうございました。

